

氏名 うちだかずこ
学位 内田 嘉壽子
学位記番号 博士 (歯学)
学位授与の日付 新大院博 (歯) 第 24 号
学位授与の要件 平成 17 年 3 月 23 日
博士論文名 学位規則第 3 条第 3 項該当
リハビリメイクの精神心理学的効果についての研究

論文審査委員 主査 教授 齋藤 功
副査 教授 高木 律男
教授 野村 修一

博士論文の要旨

緒言

1970 年代、あざや傷跡をカモフラージュする、また化粧をするという心理的効果を医療のなかに組み込んだメディカルメイクアップが、イギリス赤十字病院で行われて以来、欧米では各病院で積極的に取り入れられ、医療の一環として専門の機関を持つ病院も増えている。

著者であるかづきは、手術や外傷、熱傷後の瘢痕、血管腫、膠原病による皮膚の変化などに対して、メイクアップによる精神的ケアを行うリハビリメイクを報告した。リハビリメイクで行うメイク法と、従来のカバーリングメイクとの違いは、①崩れない、②べたつかない、③短時間で施術可能、④特別な化粧品は不要、などである。従来型のカバーリングメイクでは、患者が患部をメイクアップによって隠しているということで引け目を感じ、患者の社会復帰の妨げとなる場合があった。リハビリメイクによるメイク指導では、初回時のメイクで患部等をしっかり隠し、次の段階から少しずつメイク自体を薄くしていく。傷のある方の多くがその傷の部分のみにこだわってしまうため、視点を変えて顔に魅力的な部分を作っていくようにすることを特徴としている。他者の視線を患部ではなく目や眉毛などの他に移すことにより、自己のボディイメージを変容、あるいは受容させて社会復帰を支援する考え方で行われている。また、リハビリメイクによるメイク指導は、4～5名からなるグループ形式のアプローチで行われる。このリハビリメイクは、精神医学における行動療法、認知療法と類似し、医療チームと連携することの必要性と有効性が報告されている。そのため、リハビリメイクによるメイク技法とメイク指導法が、顔や身体に悩みのある人に対して、精神心理学的効果を客観的に評価することは、そのような悩みをもつ方々の社会復帰を支援するためのアプローチ構築に重要と考える。そこで、本研究では、リハビリメイク施行前後の調査表によりリハビリメイクの精神心理学的効果を調べることにより、その意義を明らかにすることを目的とした。

方法

対象を 2003 年 1 月から 2004 年 3 月までにリハビリメイクを施行し、承諾の得られた

187名（女性181名、男性6名、平均年齢34.9歳）とした。「否定的自己認知」に関する10項目、「対人認知」に関する11項目、「強迫的思考」に関する11項目、計32項目からなるうつ病認知スケールを調査表として使用した。各被験者について、この3項目とその総合評価を危険域（-1点）、中等度問題あり（0点）、問題なし（+1点）の3段階の状態に分類した。施行前後の変化を点数（メイク後の点数－メイク前の点数）として統計学的検定を行った。

結果

本研究の被験者が有している疾患と症状は、複数回答可で、交通外傷後が34名（18.2%）、口唇裂術後が26名（13.7%）、熱傷後瘢痕・ケロイド12名が（6.4%）、美容整形手術後を含めて手術後が27名（14.4%）であった。皮膚疾患として太田母斑・扁平母斑が14名（7.5%）、にきびが10名（5.3%）、血管腫が9名（4.8%）であった。醜形恐怖症の4名（2.1%）を含め、精神疾患が10名（5.3%）で、その他顔面神経麻痺が3名（1.6%）などであった。

「否定的自己認知」に関して、リハビリメイク前に危険域であった人が33名（17.6%）、施行後11名（0.59%）となった。同様に危険域にあった人は、「対人認知」に関して施術前40名（21.4%）で施術後20名（10.7%）、「強迫的思考」に関して施術前23名（12.3%）で施術後16名（8.6%）、総合評価に関して施術前25名（13.4%）で施術後8名（4.3%）であった。統計学的検定で、「強迫的思考」に関して有意水準5%未満、「否定的自己認知」、「対人認知」と総合評価に関して有意水準1%未満で減少を認めた。

考察

「否定的自己認知」、「対人認知」、「強迫的思考」、ならびに、これらの総合評価のいずれに関して、リハビリメイクが精神心理学的に良好な状態をもたらすことが示された。このような変化は、リハビリメイクの技法とその指導法（グループアプローチと個別アプローチ）が大きく関与していることが推察され、その有効性が示唆された。今回の研究は、リハビリメイクの精神心理学的な効果を科学的に扱った最初であり、今後、多方面からのアプローチが必要である。一方、顔や外見上に悩みを持つ人の精神・心理面を解析するための手法は、不十分であり、より効果的な調査方法を検証し、確立・開発すべきことも今後の課題である。

まとめ

リハビリメイクは、医療従事者との連携を図ることで、今後の全人的医療の一翼を担うことも可能であると考えられる。本研究では、患者のQOL向上のため、病院などの医療機関との連携を密にとりながら社会復帰を支援することを目標に行われるための有効性が示唆された。

審査結果の要旨

この研究の目的は、リハビリメイクによるメイク技法とメイク指導法によって行ったリハビリメイク施行前後の調査表により精神心理学的効果を調べ、顔や身体に悩みのある人に対しての精神心理学的効果を客観的に評価を行い、そのような悩みをもつ方々の社会復帰を支援するための意義を明らかにすることである。

本研究では、対象を2003年1月から2004年3月までにリハビリメイクを施行し、承諾の得られた187名（女性181名、男性6名、平均年齢34.9歳）とした。「否定的自己認知」に関する10項目、「対人認知」に関する11項目、「強迫的思考」に関する11項目、計32項目からなるうつ病認知スケールを調査表として使用した。各被験者について、この3項目とその総合評価を危険域（-1点）、中等度問題あり（0点）、問題なし（+1点）の3段階の状態に分類した。施行前後の変化を点数（メイク後の点数－メイク前の点数）として統計学的検定を行った。

その結果、本研究の被験者が有している疾患と症状が、複数回答可で、交通外傷後が

34名(18.2%)、口唇裂術後が26名(13.7%)、熱傷後瘢痕・ケロイド12名が(6.4%)、美容整形手術後を含めて手術後が27名(14.4%)であった。皮膚疾患として太田母斑・扁平母斑が14名(7.5%)、にきびが10名(5.3%)、血管腫が9名(4.8%)であった。醜形恐怖症の4名(2.1%)を含め、精神疾患が10名(5.3%)で、その他顔面神経麻痺が3名(1.6%)などであった。

「否定的自己認知」に関して、リハビリメイク前に危険域であった人が33名(17.6%)、施行後11名(0.59%)となった。同様に危険域にあった人は、「対人認知」に関して施術前40名(21.4%)で施術後20名(10.7%)、「強迫的思考」に関して施術前23名(12.3%)で施術後16名(8.6%)、総合評価に関して施術前25名(13.4%)で施術後8名(4.3%)であった。統計学的検定で、「強迫的思考」に関して有意水準5%未満、「否定的自己認知」、「対人認知」と総合評価に関して有意水準1%未満で減少を認めた。

したがって、「否定的自己認知」、「対人認知」、「強迫的思考」、ならびに、これらの総合評価のいずれに関しても、リハビリメイクが精神心理学的に良好な状態をもたらすことが明らかになった。このような変化は、リハビリメイクの技法とその指導法(グループアプローチと個別アプローチ)が大きく関与していることが推察され、患者のQOL向上のため、病院などの医療機関との連携を密にとりながら社会復帰を支援することの有効性が示された。

本研究は、リハビリメイクの精神心理学的効果を科学的に扱った最初の研究であり、従来行われてきたリハビリメイクが、患者の社会復帰支援の一手段として極めて有効であることを客観的に立証した点に学位論文としての価値を認める。